

## 宇治っ子朗読劇団☆Genji「宇治十帖ものがたり」(2016.2.13)

まず衣裳の豪華さに目を奪われました。子どもたちが古典の源氏物語に興味を持って朗読するというのは、将来が楽しみですね。全員楽しんでいる感じがあって好印象でした。ぜひ続けていただきたいと思います。

本を持ちながらしゃべっているのを観客は見るわけですから、本の持ち方、目線、動きなど「観せる」ということをもう少し計算したほうがよいように思われました。特に狂言回しの役割の3人に、声の方向が考えられていなくて、観客に向かっているのか、相手に向かっているのか、戸惑いや違和感を感じる部分がありました。彼らだけ台本を持たないとか、持っても、3人で話すところはしっかり目線を交わすとか、センターでの「芝居」との差がもっとあったほうが構成としてもわかりやすかったのではと思います。

登場人物の紹介を、その登場人物の動きとあわせて行なっていたのはとてもわかりやすかったです。もう少しポーズをきっちり決めるなどするとより良かったと思います。

宇治川？ですか、布がず〜っと前にあって、結界なのかなと思っていたら、舟に乗るシーンでやっと川となりました。せつかくの布、波の動きを入れて欲しかったです。松が動いて舟が進んでいるように見えるのはとても面白いのに、川が動かないので半減です。そして、布持ちの人は、黒衣を着るとか、せめて烏帽子だけでも取って欲しかったですね。

現代文でのシーンのあとに古文で同じシーンをするのは大変わかりやすく、古文に興味を持つ人が増えるのではと思います。前半の古文の部分もそうしたらよかったかもしれませんが、くどくなるので避けたのでしょうか。そこは、特に前半なので、頭に入りやすく、わかりたいのにわかれないうもどかしさがありました。現代文と古文を1行ずつ交互にするなど、今後の課題にしてみてください。

ラストに台本を持っている人と持っていない人がいるのが不自然でした。持っていない人も閉じるなどして全員暗誦のほうが気持ちよかったです。

朗読とは、朗読劇とは、というような話になりますが、本を持っていても覚えている人と覚えていない人の違いなのか、意識の違いなのか、差があるように思われました。覚えていても「本を持つ」という形をとっているのですから、目線は、本にあったり、意識的に目をあげたりという演出が必要だと思います。今後の課題にしてみてください。

猫会議 飛鳥井かどり